

研究ノート

日本におけるフレーベル教育の伝統

—25周年記念Jubiläumに寄せて—

酒井玲子

目次

- I. フレーベル教育の導入
 - (1) 幼稚園と恩物教育
 - (2) 関信三の翻訳
 - (3) 英米・独文献の導入
- II. フレーベル教育の実践
 - (1) Howeとフレーベル著書の翻訳
 - (2) J.K.U.によるフレーベル教育の導入
 - (3) 福祉と教育の結合
 - キェックリヒの実践—
- III. 今日の実践への継承—事例として—
 - (1) 東京・玉成幼稚園における恩物教育
 - (2) 京都・たかつかさ保育園と園庭

はじめに

1) フレーベル (Friedrich A. Fröbel 1782-1852) が創設したKindergarten⁽¹⁾はドイツのBad Blankenburg市が発祥の地である。2007年は1982年の生誕200年祭から25年目に当たり、当市で9月21～22日に国際的なJubiläum (記念祭) が開催された。

“Fröbel-Traditionen im Kindergarten im heutigen Japan” というテーマのVortrag (報告) が私に要請された。当日は時間の制約で、当初予定の内容を大幅に変更・削除せざるを得なかった。この報告内容は

独文の記録集に委ねるとして、ここでは、あらかじめ追究していた内容等を研究ノートとして載せたい。

ここでは第1に、フレーベルの精神やKindergartenの日本への導入史を実践者の視点から眺め、第2には、今日、発展的に継承されている実践例を取り上げたい。

2) 北星学園は1887年 (明治20) に米国人婦人宣教師サラ・C.スミス (Sarah C. Smith) によって設立された女学校に始まった。

2007年で120年を迎えたが、この女学校付設の幼稚園は札幌での嚆矢であった。しかしこれは敷地や財政的理由で7年後に廃止され、ミッションボードの施策で小樽市ローズ幼稚園に継承されている。ここには今でもクララ・ローズ (Clara Rose) 達によって使用された教育遊具の恩物 (Gaben) が保存されている。

わが国のフレーベル教育史を問うことで、現下の「幼保一元化策」等、Kindergartenの意味や方向を探りたい。

I. フレーベル教育の導入

(1) 幼稚園と恩物教育

1) 日本における幼稚園は、1875 (明治9) 年、東京女子師範学校付属幼稚園の開設に始まるとされてきた。この幼稚園には、政治家や官僚、企業家など国の上層階級

や富裕層の子弟が通園していた。⁽²⁾

ところで、これまで我が国の嚆矢とされてきたこの官立の幼稚園に先立つ3年も前の1873(明治6)年に、京都では「鴨東幼稚園」や2年後の船井郡龍正寺に「幼穉院」や「柳池幼穉遊嬉場」が開設されていたのである。そこでは、フレーベル式の遊具、すなわちGabe(恩物)が使用されていた。京都における幼児教育施設の設立が帝都よりも早かったのは、旧都としての教育の先進性が考えられる⁽³⁾。

2) この東京の幼稚園の主任保母は、日本男性と結婚したドイツ人の松野クララ(K. Matsuno Ziederman)である。これまでの研究では、彼女はベルリンのPestalozzi-Fröbel-Haus(PFH)の出身といわれて来た。しかし、年代の照合からその前身の保母学校出であったと推測される。それが事実とすれば、この幼稚園の主たる実践がフレーベルの恩物教育(Gaben-Erziehung)であったこととも照合するのではないか。⁽⁴⁾

実際、この幼稚園では、一日の保育が4時間の流れで、概ね、修身、物語、戸外遊び、恩物(積木)、遊戯か体操、昼食後は戸外遊び、また恩物を使用していた。

つまり一日の大半は恩物の操作と問答形式による知識の教育に費やされていた。当時はそれがKindergartenの創設者であるフレーベルの教育内容と理解されていたことによる。この点、その理由や背景についてなお言及する必要がある。

それは先述の松野クララの教育実践にあるし、また、関信三等による英・米国のフレーベル関係書の精力的な翻訳作業とその実施が大きかったと言える。

(2) 関信三の翻訳

1) 彼は、上記、東京女子師範付属幼稚園の監事(園長)であり、フレーベル教育法の翻訳書や著書を他に先駆けて出版した。フレーベルが製作した遊具の名称を「恩物」の翻訳したのは関信三とされている。その言われに関連する点は以下の通りで、仏教の物を拝領する言葉の「恩賜(おんし)」と言われる。また、恩賜(ありがたい)の品を意味する「恩物(おんもつ)」等からの使用が推量される。

関による代表的な翻訳本は、米人ドゥアイ著の“The Kindergarten”(1872)で、それは、『幼稚園記』(全3巻)として刊行されている。

この書は、最初、中村正直の論文として『教育雑誌』第4号に掲載されたもの。第二、三巻は、謡歌、詩、小説、図画、劇、教科などが図絵付で叙述された幼稚園教育の方法書である。

しかし、その反面、謝恩、感徳、仁慈、訓誘などの日本的で、仏教的な和訳は、仏僧であった関ならではの表現と考える。

2) 次に関の著書という『幼稚園創立法』をみると(1878、明治11年)、これは、英米の幼児教育書を基に幼稚園の在り方を記したものであることが分る。

そこには幼児教育論、「始祖ノ略傳」としてフレーベル伝の紹介、「幼稚園」の名称解説がある。

特にそこでの、園庭での草木、花蕾の栽培、その最善の方策の記述には注目したい。⁽⁵⁾

すなわち、老練な園丁が草木を培養する方法で、「天稟ノ精神」を伸ばし、「邪欲」や「眩惑」によらない「幼稚天賦ノ本性ヲ養成スル適切ノ方法」が幼稚園教育の基本であると述べている。それらはフレーベルKindergartenの内容での重点を指摘したといえる。

関の他の業績は、英米書が原本になっている『幼稚園二十遊嬉』がある。ここでは特に、20種の恩物の論拠が記されているが、フレーベル著書に20のGabe, すなわち遊具は見当たらない。⁶⁾

総じて考察すると、明治初期のフレーベル教育論や方法の受容と導入は、政府主導で、主に幼稚園教育法、特に恩物使用法であったといえよう。

この当時は、フレーベルの二大著作『人間の教育』や『母の歌と愛撫の歌』の独語版の所在が不明でもあり、教育展開上の必要から、主として英米の実用的な幼稚園教育書が翻訳紹介されたと考えられる。

しかし、フレーベル人物伝や彼の思想と教育論も若干著されている。⁷⁾

(3) 英米・独文献の導入

翻訳されないままの英文・独文も結構多く、以下はその一部ではあるが導入されたフレーベル文献である。

{英文}

W. W. Hailman, “Kindergarten Cultuer in the family and Kindergarten” 1873

A. Hoffman, “Kindergarten toys, and how to use them” 1874

H. Nora, “Plays for the kindergarten” 1873

J. Payne, “Fröbel and Kindergarten System of Elementary Education” 1874

E. Wiebe, “The Paradise of Childhood”: “A Practical Guide to kinder-Gartners”

E. Shireff, “Claim of Fröbel’s system to be called new education” 1877

A. Douai, “Fröbel’s Kindergarten occupation”

H. Mann, “Reminiscence of Froebel” 1882

E. Peabody, “Kindergarten Messenger”

1873

M. Kriege, “The Child, its Nature and Relations” 1872

E. Peabody and H. Mann, “Moral Culture of Infancy and Kindergarten Guide” 1876

M. H. Kriege, “Friedrich Froebel” 1876

A. S. Welch, “Object Lessons for Teacher” 1873

(独文)

J. Wellauer, “Über Kleinkindererziehung” 1869

L. Morgenstern, “Das Paradies der Kindheit” 1871

“Der Kindergarten und die Schule” 1874

Harmann Goldammer, “Der Kindegarten” 1874

A. B. Hanschmann, “Friedrich Fröbel” 1874

“Das System des Kindergartens nach Fröbel” 1874

M. Bertha, “Von der Wiege bis zur Schule an der Hand Friedrich Fröbel’s” 1874

F. Seidel, “Katechismus der Kindergärteneri” 1875⁸⁾

II. フレーベル教育の実践

(1) Howeとフレーベル著書の翻訳

1) ハウの役割

初期のキンダーガルテンの設立や教育実践はキリスト教の婦人宣教師の貢献が大きい。彼女達はフレーベル教育の内容と精神をキリスト教伝道と合流させて導入している。

1887年(明治20)年、アニー・L・ハウ(Annie Lion Howe)は米人宣教師として神戸教会に赴任。その後彼女は、頌栄保母養成所(Shouei kindergarten Training

Shool)と付属幼稚園を設立した。

当時は、実際にその幼稚園や養成所で使用する教材に乏しく、この必要性がハウをして種々の教科書や保育書を出版させる契機となっている。

ハウは米国のシカゴにある“Chicago Froebel Association Kindergarten Training School”等で学んだが、ここの校長、パットナム (Alice. H. Putnam) は、ブロー (Susanne Blow) の系統のフレーベル主義者(フレーベリアン)であった。つまりハウは、恩物教育法を主として習得していたことがわかる。

しかし、ハウのフレーベル理解に多大な影響を及ぼした人物は、Putnam以外にも M. Bülow、やHenriette. Schlader = Breyermann等のドイツ人フレーベル教育家、E. Peabodyなどの米人などがいた⁽⁴⁾。

これらを見ると、伝統と改革理論の双方が彼女の教育論と実践に影響を及ぼしたと察知するが、それはハウの活躍した時代と密接に切り結んでいる。

2) フレーベル著書の翻訳

さて、ハウはフレーベル教育論や恩物の使用法を頌栄保母養成所や幼稚園に導入する一方で、英文フレーベル関係書を和久山きそ等、日本人の補助で精力的に翻訳している。

まず、1895 (明治28) 年、“Mutter-und Kose-Lieder”を和訳したが、これは我が国における最初のフーベル著書の翻訳である。

これは、S. Blowの“The Songs and Music of Friedrich Froebel’s Mother Play” (Mutter und Kose-lieder)”やM. Kriegeの“The Child, it’s Nature and Relations”の英文からの和訳である。

歌の数、内容はほぼ原文に忠実であり、注目すべきは、挿画を当時の日本人の服装、風俗、自然、社会等の描画に置き換えたこ

と、毛筆の文語体で執筆されたことにある。つまり、フレーベル精神を日本の感覚に訴える配慮がなされたのである。その画のユニークさや芸術性にも目を見張るものがある⁽⁹⁾。

次に、彼女は最初の毛筆版のフレーベル著『人乃教育』を翻訳し、1924 (大正13) 年に刊行した。これは米国人Josephine Javisらの英文“Man’s Education”からの翻訳である。当時、我が国では、最初の幼稚園から22年も経っていたのだが、未だこの主著は翻訳されていなかったのである。

当時のその事実からいえば、この出版は画期的なことであった。

日本は国粹主義的な風潮へと傾斜していったが、にもかかわらずハウには教育現場にフレーベルの哲学が「教育上の新生命」を吹き込むという信念があった。⁽¹⁰⁾

さらにハウは、数多くの翻訳書、幼児保育書を出版し、手書きのままでテキストに使用していた。

本稿の、「わが国におけるフレーベル教育の伝統」について述べる際、ハウの役割は甚大でその業績をなお追究する必要がある。2007年、西垣光代によって『A. L ハウの生涯』が出版されたのは大いなる前進である。⁽¹¹⁾

頌栄保育短期大学と幼稚園ではフレーベルの誕生日には記念会などを実施し、その精神を今に継承している。

(2) J. K. U. によるフレーベル教育の導入

1) その活動

以上、ハウ達、日本で保育活動に携わる婦人宣教師は、1906 (明治39) 年に各プロテスタント・キリスト教会合同で、“Japan Kindergarten Union” (日本幼稚園連盟) を発足させた。ハウが初代会長のこの連盟では、会誌、“Annual Report of the Japan Kindergarten Union” (「J. K. U.

年報)を発売している。

これによって、1906年から1936(昭和11)年に至る連盟の活動状況、国内外の研究内容、論文、幼稚園や保育者養成の実態等、詳細に知ることができる。この年報は、わが国のKindergartenとフレーベル教育史研究にとって重要な資料である。

J. K. U. の活動目的は、次のようである⁽⁷⁾。

- 2条 幼児ための仕事を効果的に進めるために在日外国人の幼稚園教員が相互に相談し、協力すること
- 3条 この会の事業は、1. 幼稚園の教育内容、諸外国の幼稚園の実情把握
2. “International Kindergarten Union”(I. K. U.) の関係の確立
3. 年報の発行
4. 情報の提供

J. K. U. のI. K. U. への加盟(1907)は、激動する海外の保育動向の把握、フレーベル教育論のより深い理解と幼稚園への導入、そして新しい研究活動に重点を置くという目的をもっていた⁽⁸⁾。

2) J. K. U. と新教育の潮流

この間、米国の教育改革運動は日本のフレーベル教育に如何なる影響を与えたのか。日本の1920年代はいわゆる「大正デモクラシー」の興隆とも相俟って、硬直した恩物教育とフレーベル教育全体へ批判の矛先が向けられた時代であった。

その先鋒を担いだのが倉橋惣三で、彼はJohn Dewey等、アメリカ実証心理学の影響を受け、フレーベル主義者が信奉する恩物教育全体に理論的反駁に乗り出した。プラグマティストの彼は、フレーベル教育哲学への批判も展開したのだが、これについての自分の見解は1998年Berlinの学会発表しておいた⁽⁹⁾のでここでは省略する。

それらの恩物教育批判の潮流下に、日本では恩物使用からの離反が徐々に強まっていったと考えられる。

こうした傾向が幼児教育界を風靡する中、フレーベル教育論の真髄はJ. K. U. によって再認識されていく。

フレーベルが説く、神の永遠の法則に従い、自己の決断によって活動する主体的な人間像、すなわち、「神と同様に創造し、活動」⁽⁴⁾する人間の教育である。

ドーソン(Dowson)やハウなどJ. K. U. のメンバーは、フレーベルの「部分的全体」(Glieder Ganzes)⁽⁵⁾を引用し、個人と全体世界との平和的な結合を説いた。それは第一次世界大戦下で、キリスト教平和主義の立場を貫くことに繋がったといえる。

J. K. U. の創立当初には、キリスト教幼稚園数17、保母養成校は2校だったが、1935(昭和10)年には、それぞれ330園と園児数14,015人、養成校10校に膨れ上がっている。

この数字は、J. K. U. に結集した婦人宣教師の活躍、特に、超教派活動の実績とも言えよう。

(3) 福祉と教育の結合

— キュックリヒの実践 —

1) キュックリヒの足跡

我が国におけるフレーベル教育の継承者としては、J. K. U. と基督教保育連盟の要職を歴任したドイツ人キュックリヒ(Gertrud Elisabeth Kücklich 1897-1876)を挙げなければならない。

その略歴は彼女の精神の遍歴をも表している。1922(大正11)年、彼女は福音教会本部より派遣されて来日、第2次世界大戦中下、激動と混乱下にこの国に留まり、一貫して宣教・福祉・教育活動に携わった。

彼女は1917年、第一次大戦中にベスタロッター・フレーベルハウスに入学している。ハウスは当時ハイル(Hedwig Hyle)施設長の下で、福祉と教育の多機能を備えた機関として拡張していた時代にあたる。

生命の合一 (Lebens Einigung) と精神的母性 (Geistige Mutterlichkeit) を掲げるSchlader=Breymann (シュラーダー=ブライマン) とその後継者たちによるハウスでの教育と福祉の精神は、キュックリヒに宿り、日本の土壌で開花したに違いない。彼女は南ドイツ女子高等師範学校を経て郷里のシュトットガルトで虚弱児施設に勤務し、その後に来日する。

その最初の活動は、東京鐘ヶ淵紡績工場の職場保育所を、「託児」から「教育」の場へと転換させた努力に集約されている¹⁰⁾。福祉と教育の結合である。それは当時、富裕層の子弟は幼稚園へ、貧困層は託児所に委託されるという、二元化政策が取られてきたことへのアンチテーゼである。

その後、東京の向島で、Kinderhaus=「子どもの家」を、その後の小石川に東京保育女学院を設立している。いずれもフレーベルの教育の実践である。

戦後1946 (昭和21) 年、彼女は、埼玉県加須 (kazo) 市に戦災孤児院の愛泉園 (Aisenen) と乳児院、幼稚園 (保育所をかねたKindergarten)、1953 (昭和28) 年には老人福祉施設を設立している。

2) フレーベルの精神とは

「生活教育」(Lebens- Erziehung) の視点に立ち、幼児の生活に即したものでなくてはならない、というのがキュックリヒの信条であった。

彼女は実践家ゆえに著書は少ないが、多数の講演や対談記録が残されている。例えば1938 (昭和13) 年、『キリスト教保育』誌には「フレーベル先生を思う」と題して、フレーベルの教師像の特徴を語っている¹¹⁾。

その第一に、フレーベルを祖国愛の戦士と位置付ける。これは彼のナポレオン戦争への従軍等を指すが、多分に日独の時代背景をも考慮してのことであろう。

第二は、神性と善性を備える子どもに生

活を捧げた人物として描く。これはフレーベルの「子どもに生きる」精神を指している。

第三は、フレーベルと同労者の関係における「生活の一致」である。その「調和と協力の精神的結合」が「教育家族」集団を支配していたと指摘している。

第四は、妻のヴィルヘルミーネを母の教育者像としている。フレーベル集団=「教育家族」を支えた母性への賛辞である。

以上のようなフレーベル像は具体的であり、実践界への教育的意味導入の役割を担った。そこにはキュックリヒの人生観も色濃く反映されてはいるが、概してフレーベル精神の根幹が継承されているといえる。

反面、フレーベル恩物の取り扱いについては柔軟である。荘司雅子との対談では、「私は、恩物という名前を無理に使わなくても、恩物の目的である、子どもの創造性を引き出すために必要な材料を与えるということだと思います。自然にそくしたものです。」¹²⁾と荘司に語らせ、自らもそれに同意する。

キュックリヒのフレーベル精神は、若き日、Pestalozzi-Fröbel-Hausで受けた教育やフレーベルの著書の影響が大きい。また、あの凄惨な第2世界大戦という時代的な要請もあって、福祉と教育の結合が必然の選択であったと考えられる。

彼女が設立した、加須 (かぞ) 市における老人福祉施設と乳幼児保育施設は、後継者に引き継がれ、現在も発展している。

II. 今日の実践への継承—事例として—

(1) 東京・玉成幼稚園における恩物教育

1) 「玉成」の名称

ソフィア・A・アルウィン (Sophia Arabella Irwin) は特定のキリスト教宗派に属せず、一般的キリスト教信念によって活

動を展開した。その点では我が国では異色のフレーベル教育家である。

アルウィンの事業は、1916（大正5）年に東京麹町に「玉成保姆養成所」と付属幼稚園を設立したに始まる。その『玉成』の名称の元はフレーベルの恩物（Gabe, Gift）に由来する。「玉」は球、珠、毬を意味し、完全なる人格形成を目標するもので、宇宙の完全形態の基礎となる「球」と日本語の「珠」とを一致させて、教育によって「玉と成る理想」を追求したものであるという¹⁰⁰。

1932（昭和7）年の『幼児の教育』には彼女の講演記録「フレーベルを想ひながら」が掲載されている。

一方、アルウィンは、恩物や手技のみならず、神や自然への賛歌が彼の教育遺産であり、新しい教育への歩みがフレーベルの意志であるという。

アルウィンの恩物教育は、『フレーベルの恩物の理論とその実際』（1955年）に結実された。¹⁰¹

ここには、「恩物について」の解説と第10恩物までの意義と目的と図入りで詳細な取り扱い方法が記されている。当時こうした解説書は我が国には類を見ない。そこには、フレーベルの教育の「生命合一」（Lebenseinigung）を基本的な形に表した恩物という遊具の活用をフレーベルの精神から解き明かしている。

2) フレーベル精神の実践

アルウィンの米、独、伊での研修の成果はフレーベル保育理論、恩物手技の理論と実際、モンテッソーリの感覚教育、母と子遊戯、児童哲学等の保育者養成所校の担当科目に表されている。

特筆すべきは1934（昭和9）年に、茅野蕭々訳『母の歌と愛撫の歌』（新訳版）がアルウィン等、J. K. U. 編集委員会によっ

て刊行された事である。

3) 恩物遊びの伝統

震災や戦火で焼失した施設は3度移転し、戦後の1952（昭和27）年より、今日の杉並区松庵（すぎなみくしょうあん）の地で保育者養成と幼稚園の実践が継承されている。

今日ではそこに乳児の保育園を併設し、子どもの数が全体として200人、教職員の数は20人に及ぶ。

広い園庭を用いて運動会やキャンプファイヤー、庭造りなど多彩な実践を展開している。

2000年には『フレーベルの恩物であそぼう』を出版し、教育の特色を以下のように記しているである。

「幼稚園教育の父祖フレーベル氏の考案による教育玩具、恩物（Gift）の第1～第10及び手技工作を保育の中に取り入れて、幼児の知的能力、創造力、調和の美などの感性を培っています。遊びの中で、多くのことを体験し発見するなどの、自発的な活動を見守りたいと考えて、遊ぶ時間を十分煮取っています」¹⁰²

ここでは恩物の使用法が実際に遊ぶ幼児の写真や挿画入りで詳細に説明されている。

その中で以下のような説明がある。

第1 恩物

まり（球）を使用した遊びの経験が乳幼児の自己活動を促し、内在する力を引き出し、その発達を助ける最も適した適具

第2 恩物

既知（球）と未知（立方体）の中間に両者を結ぶ性質をもつ円柱を加えた物、この3形態は自然の基本である、回転と静止の遊びによってその類似と相違点を認識する。

保育者の「ことばかけ」と子どもと保育者の「うごき」『留意点』の丁寧な説明がなされている。

現在、恩物を指導できる教師は少ないそ

うだが、こうした解説書が活用され、今でも保育の重要な部分を占めているという。

(2) 京都・たかつかさ保育園と園庭

1) 「保育園は子どものふる里」

これはこのたかつかさ保育園のモットーで、「子どもが、現在を最もよく生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培う」(「保育所保育指針」)には何をなすべきかと、と常に問うている。

1980年、京都の都市部にあって比較的広い約600m²の園庭を確保した。

以下は、そこをどのような空間にすべきか、そのまとめた点である。

- 1) 固定遊具最低限の設置にとどめること。
- 2) 四季の循環を居ながらにして感じとれる園庭づくり、そのために樹木を積極的に植える。
- 3) 木の登りなど、遊びの空間を作る。
- 4) 菜園など、栽培活動を保育の重要な領域とする。

2) 保育環境の緑化

この園では北緯35度の気候で成長する果樹や花木を栽培し、小動物を育てている。

子ども時代の原風景を作ろうと藤井修園長他、保育者や職員総勢38名、150人の子どもたち、そして父母とが共同の作業を展開している。

この保育園は、元来、フレーベルの精神によって立てられたものではないが、かねてから藤井園長はフレーベルKindergartenに着目して、荳司雅子編の『フレーベル全集』などを読み、自然や園庭について研究してきた。また、ドイツのKleingartenについても関心を寄せ、文献研究を手がけている。

1999年には創立20周年を迎え、小冊子『すてきななかま』を発行した。そこには

ブラックベリーやさくらんぼ、桃やびわ、ユスラウメ、アンズ、びわかりん、もも、ブラックベリー、ジュンベリー、夏ミカン、カキ、グミ、欽、キウイ、ナツメヤシ、みかん、ざくろなどを栽培し、収穫し、ジャムなどを作って楽しむ子どもたちの様子が生き生きと映し出されているのである。木の葉やドングリのクラフトはまさに芸術の域に達している。

この園では、子どもたちが自分の興味・関心にそって、没頭できる環境と時間を作り出すことで、自己活動力を伸ばしていけると語る。これはフレーベルの教育にも繋がっているだろう。

3) 蚕の飼育

とりわけ注目するのは蚕の飼育である。蚕の飼育が簡単で衛生状態も良く、一生のサイクルは移動が少なく絹糸になるまでの撚糸工程は2ヶ月で育てやすい。

つまり、受精卵から約1カ月で4度の脱皮ののちに繭になる。桑の葉が茂る春から秋まで4回ほどこれが繰り返されるという。

京都は古くから桑が植えられ、絹織物の生産地であった。保育園で蚕を飼育するためには、近郊の桑の葉を確保するために地域とのつながりができている。また、飼育についての援助を親達のみならず、地域の住民や園児の祖父母の世代とも交流を広げている。

蚕の繭が繊維を作るという生命の循環を体験できるということと近隣への愛着は、大いにこの園の保育目標にかなっている。

そして、これは地域の自然や社会への精通が立派な市民へと成長させる⁽²⁾、というフレーベルの言葉を思い出させるのである。

おわりに

最初に述べたように本稿は、本年9月開催のJubiläumにおいて、発表した独文原稿を大幅に修正・加筆した和文の研究ノートである。

II章については写真や資料を説明したが、ここでは省略した。

当日の報告の後、日本へのフレーベル文献や教育が米国経由であったこととその意味するものが理解できたという意見が出された。また、京都・たかつかさ保育園の園庭での保育は大いに関心を集め、ドイツにも必要な実践であると述べた参加者がいた事を付記しておく。

[注]

- (1) フレーベルが1840年にKindergartenを創設した当時、両親が働きに出て路地に裸足で遊ぶ子どもたちを主として対象としていたので、これを「幼稚園」と訳すのは適当ではない。従ってこの研究ノートではドイツでの発表ということもあり、幼児保育施設の総称としてKindegartenという用語を使用した。
- (2) 倉橋総三、新庄よしこ『日本幼稚園史』臨川書店 1983
京都では、それに先立つ3年前の1873（明治6）年に、鴨東幼稚園等が開設されていた。
- (3) 藤田博子「明治初期の京都へのフレーベル教育移入とその背景～Lehman兄弟とのかかわり～」日本ペスタロッチー・フレーベル学会第15回大会発表資料 1997年
- (4) Henriette Schrader=Breymann (PFH) がハウスの前身の保母学校に着任したのは1873年で、彼女はすぐにその教育改革に取り組んだ。1878年にはこのPFHに改名した。松野はこの2年前にすでにこの東京の幼稚園に着任しているので、彼女はPFHではなく、その前の保母学校で学んだと考えられる。
ブライマンはビューローの後任でキンダーガルテンと保母養成所に勤務した時、フレーベル遊具を形式的に導入した保育が展開されていた。その教育は「あまりにも学校的であり、子供達は専ら数学の基礎に基づく知育偏重の課題が課せられていた」という。
Schrader = Breymann, “Beiträge zur Geshi-

chtes Pestalozzi-Fröbel-Hauses in Berlin”
No.25 1893 S.6～7

- (5) 園庭の説明
「天工ヲ養成シ曾テ其本質ヲ逆制セズ草木ヲシテ不自由ノ境ニ生長セシメ以テ其保養ヲ怠ズ此ノ如クナルハ必ず将来開花結實ノ美栄アル期シテ待ツベキナリ 布列氏ニ茲ニ著目シ自ヲヘヲク無情ノ草木既ニ固有ノ美栄ヲ完成スルニハ必ず本質適切ノ培養法ヲ施サザルヲ得ズ況ヤ有情ノ人類ニ於テヤヤ嬰兒ト雖必ず適切ノ教育法ナカルベカラズト此ニ於テ多年其経験ニ従事シ以テ嬰兒ノ性質ヲ究知シ遂ニ幼稚学ノ一科ヲ発見セリ」
関信三 『幼稚園創立法』 1878年
岡田正章監修 『明治保育文献集』
第二巻に所収 340-341頁
- (6) 関信三 『幼稚園法二十遊嬉』 1874年 岡田正章監修 前掲書
第二巻所収 390-391頁
なお、『幼稚園法二十遊嬉』「解説」
岡田正章監修 前掲書 別巻（56-57頁）には関の恩物の記述について出典を挙げている。
- (7) 中村五六に『幼稚園摘要』（1893）第二巻に英文の幼児教育、幼稚園についての参考書掲載
関信三 『幼稚園創立法』原文
（明治17）にフレーベルの伝記を掲載（我が国最初の略伝
ジョセフ・ペーン著、山縣梯二郎 訳『フレーベル氏小傳及幼稚園』（明治20）
市橋虎之助 『幼稚園通関』（明治25）「幼稚園の起源」という卒業論文に加筆、修正してフレーベル伝を基調に自らの幼児教育論の展開
小西信八 『普列伯氏略傳』『幼稚園摘葉』（明治26）の附録として掲載）
ハウ著 『保育学初歩』（明治26）付録第一「フレーベル氏小伝」
東基吉 『幼稚園保育法』（明治37）第15章「フリードリッヒ、フロエベル」1節「氏の略傳」
- (8) 独文文献は、清原みさ子「我が国幼稚園における手技の歴史」—その1—『愛知県立大学児童教育学科論集』（第22号 1989）を参照した。
- (9) A. L. ハウ『保育学初歩』1893 S. 273-353
- (10) 『母の遊戯及育児歌』（“Mutter und Koselieder”）1895 報告では、この挿入画を参照されるように添付した。
- (11) 西垣光代『A. L. ハウの生涯』

- 神戸新聞総合出版センター 2007
- (12) Heg. J. K. U., “First Annual Report of the Kindergarten Union of Japan” 1907 S. 26-28
 - (13) Reiko Sakai: “Sozo Kurahashi als Beispiel der Fröbel-Rezeption im Zeitalter der “neuen Erziehung” in Taisho-Ara in Japan” Hrg. H. Heiland und K. Neumann “FRÖBELS PÄDAGOGIK VERSTEHEN IN TERPRITIEREN WEITERFÜHREN—internationale Ergebnisse zur neueren Fröbelforschung—” 2003 S. 166-177
 - (14) F. Fröbel, “Die Menschenerziehung” Heg. R. Lange, “Friedrich Fröbel’s gesammelte pädagogische Schriften” 1966 S. 18
 - (15) 前掲 Annual Report
 - (16) G. E. キュックリヒ 『京都市保育会報』 9号 1935
 - (17) G. E. キュックリヒ 『キリスト教保育』 21号 1938 P3
 - (18) G. E. キュックリヒ 『保育専科』 P. 84
 - (19) 倉橋は、彼女を「フ氏の精神を現代的に最もよく理解し、その最も熱心なる実験者体験者」、「熱烈な讃美を以て教育者フレーベル」と評す。
 - (20) 報告では、幼稚園の恩物で遊ぶ子どもたちの写真を添付した。
 - (21) 玉成恩物研究会 『フレーベルの恩物であそぼう』 フレーベル館 2000
 - (22) たかつかさ保育園 『すてきななかま』 1999 日常保育の畑づくりと収穫の写真を添付した。
 - (23) F. Fröbel, “Der erste Unterricht in der Erdkunde” Heg. R. Lange, “Friedrich Fröbel’s gesammelte pädagogische Schriften” 1966